

天然資源の開発利用に関する日米会議 水産増養殖部会

第6回合同会議 共同声明

天然資源開発利用に関する日米会議水産増養殖部会第6回合同会議は1977年8月27日カリフォルニア大学サンタバーバラ構内にて開催された。会議はアメリカ側部会長 William N. Shaw 氏により開会され、同部会長は両国委員に対し歓迎の辞を述べた。次いで日本側委員 藤谷 超博士が今回都合により参加することができなかった日本側部会長 佐藤重勝博士に変わり感謝の意を表わした。

藤谷委員は日本側参加委員 鬼頭 鈞博士および 斎藤 雄之助博士を紹介し、次いで Shaw 氏はアメリカ側参加委員 Robert Wildman 氏, Al Sparks 博士, Carl Sindermann 博士, Ben Drucker 氏, Conrad Maljkovic 氏, Daniel Hunt 氏を紹介した。続いて本会議の招待参加者としていぶらも海藻学の専門家であるニューハンプシャー大学 Arthur Mathieson 博士とカリフォルニア大学 Mike Neushal 博士を紹介した。カリフォルニア大学の学生 Jim Woessner 氏が通訳として紹介された。藤谷博士および Shaw 氏がこの会議の議長に、Hunt 氏および鬼頭博士が書記にそれぞれ選出された。

初めに Shaw 氏は現在アメリカにおいて水産増養殖振興のための法律制定が計画されており、アメリカの農務省および環境保護庁がこれに対し強い関心を示している。このため近い将来これらの機関からも本部会に対し代表者を参加させることとなるであろうと報告した。同氏はまた、日本側部会に対しても日本の環境部門あるいは公衆衛生部内の代表を委員として迎えることができ

此はより効果的であろうと述べた。両会議議長は後日両国部会委員名簿を交換することを確認した。

次いで日本側委員斎藤博士より「日本における褐藻類養殖の現状」「日本の水産増養殖における植物プランクトンの利用」と題する二報告が提出された。同じ日本側委員鬼頭博士からは「日本のノリ養殖の問題点」と題する報告がなされた。アメリカ側からは「アメリカにおける産業としての海藻生産の現状」と題し Mathieson 博士より報告があり、アメリカ側部会長 Shaw 氏は「アメリカにおける水産増養殖に対する植物プランクトンの利用」と題する報告を提出した。

日本側部会から今後5ヶ年のIJNR水産増養殖部会活動を以下に示すごとく逐次養殖対象部門毎の主題を持って開催する提案がなされた。

年	部 門	開催国
1977	海藻類	アメリカ
1978	海産魚	日本
1979	淡水魚	アメリカ
1980	甲殻類	日本
1981	貝 類	アメリカ

アメリカ側部会からはサケ類養殖に関するシンポジウムを近い将来に持つことが強く要求された。これに対し日本側部会から日本の水産庁においてサケに関する別枠研究が本年より開始されたことについての説明がされ、日本側としてはこの研究が成就するまで海産魚に関するシンポジウムの中にサケを含ませることができないとの強い意向が述べられた。

この結果、サケに関しては 網囲い養殖 あるいは タンク飼育 というような 養殖 についてのみ 海産魚類養殖のシンポジウムに含ませることで意見の一致をみた。両国委員は今後ちや平岡に本部会に対し提出される 全ての報告を最終的に一冊の出版物とすることを確認した。この出版物の中に サケに関する報告は掲載しないことが日本側部会から提案された。

アメリカ側部会長より 第4回合同会議が テラウエアー大学に於いて、国際水産増殖学養学会と共催の形で シンポジウムを開催し、水産増殖技術の普及という面で非常に効果的であったこと、さらに 若い科学者や学生に対し特に有益であったことが強調され、今後日本に於いて開催される合同会議も 水産庁あるいは 水産系大学等より 用いられるシンポジウムと共催の形をとることが出来ないかとの提案がなされた。これに対し日本側部会は 日本においては 水産増殖に関する研究材肉が多く、また 学生の数も非常に多いことから このような形で合同会議を開くことは極めて困難であるとの事情が説明された。この件に関しては 今後、その可能性について 充分検討してゆくことが申し合された。

本合同会議は これまで本部会活動の一環として行なわれて来た、研究者の交流が 日米両国の水産増殖技術の進展並びに 情報交換の円滑化という点で、非常に有益であったことを確認するとともに 高く評価する。次年度の交換研究員としては 日本側からは 魚病に関する 専門家 を派遣し、アメリカ側からは 魚類養殖の 専門家 を日本のタイ類養殖技術研修のため 派遣 することが申し合された。また 日本のアワビに関する 専門家 を国立以外の機関から 同部会の交換研究員として 派遣する計画も考慮されている。次年度日本から派遣される 魚病に関する 専門家の アメリカでの受入れ

については Sparks 博士および Sindermann 博士の両委員が責任を持ち、アメリカからのタイ類養殖技術研修のための研究者派遣については アメリカ側部会長 Shaw 氏が推進する。

次に文献の交換に関し、Shaw 氏はアメリカの CASIS (海洋宇宙科学情報機関) により水産増養殖に関する文献目録が作製されていること、また 海洋科学工学各省庁委員会の下部枠内である水産増養殖作業部会にて水産増養殖に関する文献の翻訳作業が進められていることと報告した。同氏はこのような機関にて翻訳された出版物は日本側部会にも活用できると述べた。更に Shaw 氏は日米両部会各委員が、その年の両国における水産増養殖に関する文献を収集し、次年度の本合同会議に提出し、相互交換をはかることを提案した。

将来可能な共同研究課題として、アメリカ側部会委員より以下の三課題が提案された。

1. 放流効果判定法
2. 海産魚類養殖
3. サケ類生産における海洋の許容生産力

これに対し日本側部会からは、日本の放流効果判定法に関する研究は結論を得るには至っていないことが説明された。さらに、サケ類に関しては、日本におけるサケに関する別件研究が終了するまでの5年間は、この論議を延期したいとの意見が強調された。海産魚類養殖については、サケ類を除いた他の種について 1978年の合同会議にて論議される。

アメリカ側部会委員 Sindermann 博士は、本部会活動の一環として行なわれている貝類の疾病に関する共同研究について報告した。同氏はまたこの共同研究が今後の IJNR 水産増養殖部会活動を進めるための成功例として高く評価できると述べた。

アメリカ側部会長 Shaw 代は バージニア海洋研究所の Dupuy 博士が太平洋産カキと大西洋産カキの間で雑種を作ることに成功したが、地域沿岸自然保護法のためこの雑種を養殖することができない事情を説明した。同氏はさらにこの件に関し、日本の水域内でのこの雑種の養殖試験の可能性について日本側部会に検討を要請した。これに対し、日本側部会委員 藤谷博士はその可能性について検討する事を約束した。

最後に日本側部会は 1978年の合同会議において開催期日、場所等アメリカ側部会の計画が明らかになり次第速やかな連絡を要請した。

1977年 8月 27日
於 カリフォルニア, サタバーバラ

William N. Shaw
アメリカ側部会長
William N. Shaw

Shigeatsu Sato
日本側部会長
佐藤重勝